

ナマの研究を出す、ナマの研究に触れる

# サイエンス・コミュニケーションのチャート

「ゲノムに触って！ゲノムで感じて！ゲノムひろば2003 in 京都」

レポーター 葛西 奈津子

2003年11月、ゲノム研究者と市民の交流イベント「ゲノムひろば」が福岡、京都、東京で開催された。日頃、研究室に閉じこもっている研究者たちが街に飛び出し、求められればだれにでもわかるように自分の研究を説明する。市民の側からは、ゲノムの時代に感じている疑問や不安を科学者にぶつける。そんな「サイエンス・コミュニケーション」をめざした、まったく新しいイベントの様子を、京都会場を中心に紹介する。



「ゲノムひろば」が生まれたワケ

科学者が専門家以外の人に向かって、わかりやすく説明をする。それは大切なことではあるけれど、簡単ではない。「ゲノムひろば」(以下、ひろば)は文部科学省科学研究費による特定領域研究「ゲノム」(全4領域)の一環として行われており、4領域の共同組織である「社会との接点委員会」が企画・運営している。税金を財源とする科研費を使い、科学者が自分の研究を市民にいかにか伝えるかを「研究」し、実践するというのがプロジェクトである。2002年に第1回が行われ、2003年は2回目。ゲノム4領域では、全国の大学・研究

機関に属する300以上の研究グループが、生物学、医学、情報科学など、さまざまな視点でゲノム研究を進めている。ゲノム研究は、基礎研究であっても応用研究であっても、直接・間接に必ず社会に影響する。その影響をつねに意識し、社会との接点を持ち続け、そこからフィードバックを受けなければ、健全な研究の発展は望めない。専門外の人々の素朴な疑問や意見、思いがけないニーズが刺激になって研究の進む方向が決まることもある。つまり、サイエンス・コミュニケーション(以下、SC)は単なる広報活動ではなく、研究そのものの重要な一部なのだ。「ひろば」はこうした考えに基づいて開催された。

「ひろば」は四つの柱から成り立っている。その一つが「ゲノム研究勢ぞろい」(以下、「勢ぞろい」)だ。研究グループごとに、ポスター展示をするところは一般の学会に似ている。主に大学院生らが中心となって、展示内容を工夫し、来場者に研究についての説明をしてくれるブースが並んでいる。

もう一つのメインが、トークセッション「ゲノム談義」だ。これは、研究者だけでなく、さまざまな分野で活躍するオピニオンリーダー4人をゲストに迎え、ゲノム研究の持つ時代的意義、社会的課題について語り合おうというもの。さらに、ゲノムの基礎知識について道案内役をしてくれるコーナー「そもそもゲノム」と、研究最前線を伝えるセッション「ゲノム」が、さまざまな知識レベルにある来場者のニーズに添えてくれる。 「社会との接点委員会」の委員であり、「ひろば」の運営を中心となって行っている加藤和氏には「このこだわりがある。『研究をそのまま、生で出す』というのが、『ひろば』の大前

「ゲノムひろば」  
2002年の第1回に続いて行われた文部科学省科学研究費特定領域研究「ゲノム4領域」によるイベント。福岡(2003年11月1~2日、エルガーラ)、京都(11月8~9日、京都三井ホール)、東京(11月15~16日、日本科学未来館)の3会場において、「ゲノム研究勢ぞろい」、「ゲノム談義」ほか、展示、「セミナー」等がゲノム研究をわかりやすく伝え、研究者と来場者とのコミュニケーションをめざす。各会場の入場数は福岡970人(2日間の合計以下同)、京都903人、東京1460人、計3333人。

提です。研究の中身だけでなく、材料、装置といった研究の臨場感と、研究者自身が出ることによって初めて伝えられるものがあるからです。ですからあえて、人を呼ぶための仕掛け的な発想で企画はしません。現在進行形の研究を見てもらえるといいと思います」

学会にはない、活気とにぎわい

会場に「歩、足を踏み入れると、そこはいままで経験したことのない空間だった。実験動物やそれをイメージしたキャラクターグッズが並んでいる様子はビジネスショーのようでもあり、学会のポスターセッションでは考えられないほど大混雑している。そのうえ、各ブースの学生や先生が次々と声をかけてきて、うれしそうに解説してくれる。

ホヤを使った研究をしている学生に、ひと通り説明を受けたあとで、「ひろば」に参加してみた手応えを聞いてみた。

「生きたホヤを実際に見られるので、子どもたちの興味を引いていますね。発生の研究でホヤはおなじみの実験動物なのですが、どうしてホヤを使うのかということを説明し、わかってもらえたのがよかったです。研究だけに専念したいという人ももちろんいますが、税金から

研究費をもらって研究している以上は、社会に研究を伝えていくことも研究者の責任だと自分は思っています。この展示の準備に、確かに時間は取られましたが、それだけの価値はあると思います。自分の研究をわかってもらうだけでなく、学会では難しくわかりにくいほかの研究室の研究も、この展示でよくわかったというのが成果です」

私は前回も京都会場に足を運んでいるのだが、カラフルでアピール度の高いポスターが増えるなど、その変化はひと目でわかった。別の大学院生が教えてくれた。「展示の仕方については、去年の3会場での経験や先週の福岡での様子から、顕微鏡を持っていった方がいいとか、『お持ち帰りグッズを用意した方がいい』といった情報をメーリングリストで交換してフィードバックしているんですよ」

なるほど、どうしたら関心を持ってもらい、理解してもらえるか研究しているわけだ。持ち帰り用資料は、レジユメのようなものばかりではない。実験動物やキャラクターを出しにくい研究室でも、子どもが大好きな対戦カードを模して「膜タンパク質カード」などというものを用意したり、研究に関するクイズに正解するとグッズがもらえるなど、説明を聞きながらそれらを集めてまわるだけで

も、十分半日楽しめるスペースになっていた。

会場には、関係する大学生に混じって、年配の男性や子ども連れのお父さん、若い女性のグループなどが見られた。中学生、高校生といった学生は少ないようだ（福岡会場では、10月に九州大学の先生が中心となって「プレひろば」を行い、地元の高校の先生を集めて「ひろば」の紹介をしたおかげで、高校生の来場が多かったという。子どもたちの反応を聞いてみよう。

「お父さんに『ゲノムひろばって何があるけど行ってみるか？』って言われて『ゲノムって何かな』と思ったので来ました。メダカとか身近なものを取り上げてくれたのが、わかりやすくておもしろかったです。理科は好きですが、高校受験の勉強が大変で、科学者になるかどうかとか将来のことはまだわかりません」（中学2年生・女）

「メダカの展示がいちばんおもしろかったです。骨のないメダカやしっぽのないメダカを見て、そういうメダカは泳げないから死んでしまつと思ひ、かわいそうだったけど、遺伝子が一つ違うだけでそんなことが起こるんだってわかりました。いろいろパンフレットをもらったし、あとは身近な台所なんかにあるもの

を使って実験できるということを教えてもらったりして、わかりやすかったです」（6年生・男）

ゲノムで人間性を語れるか？

「ひろば」2日目、午後のハイライトは「ゲノム談義」。「談義」というのは、壇の上から演者が一方的に話すのではなく、ゲストとフロアの交流、つまり専門家と社会との双方向コミュニケーションをまくるんで付けられた名前である。

京都会場の「談義」のテーマは、「現代の人間観・生命観 ゲノム研究と霊長類学の立場から」。ゲストは、霊長類研究の専門家として山際寿一氏（京都大学大学院理学研究科教授）、ゲノム研究の専門家として小原雄治氏（国立遺伝学研究所教授）、服巻保幸氏（九州大学生体防御医学研究所教授）の2氏、そして生活文化と社会を見つめる専門家として佐藤友美子氏（サントリー 不易流行研究所部長）を迎えた。

最初の小原氏のプレゼンテーションでは、ヒトゲノムのDNA塩基配列は個人差がきわめて小さく（0.1%）、チンパンジーやゴリラのゲノムに見られる種内の多様性（0.5%）に比べてはるかに均一であるという話題が出た。人間の立場で見

れば、チンパンジーよりもヒトのほうが性格や外見にしろ、行動の複雑さにしろ、ずっと多様に思えるのに、DNAレベルでは5分の1の多様性しかないというのには意外だった。いったいゲノムで説明できること、DNAに規定されているものはなんなのだ、という疑問がわく。

この点を追求したのが、山際氏のプレゼンテーションだ。山際氏は「足歩行」を取り上げ、このヒトに特有な「行動」は、ヒトとチンパンジーのゲノムに見られるわずか1・23%の差とどうつながるのかという問題提起をした。「行動」は、わずかな遺伝子の変異で説明できるものだろうか。「足歩行の遺伝子」があるとも思えない。

ゲストの間で、1・23%の中に「人間性」の遺伝子があるのか、「行動・個性・気質」などの多様性が、均質なヒトゲノムで説明できるのか、という矛盾した二つの問題が議論された。ゲノムを解明すれば、生命についてすべてわかるのか、「人間が生命を自由に操れるようになるのか」といった多くの人が抱いている疑問や不安につながるディスカッションである。ここで服巻氏から、「人間性遺伝子」の候補として、なんと統合失調症感受性遺伝子が紹介された。かつて精神分裂症と呼ばれていた統合失調症には、複数の遺

伝子の変異が関与している。この病気の患者が、時代を経て各国に一定割合存在すること（日本では人口の1%）や、患者の家系に創造性の高い人が多いことを考えると、これらの遺伝子はヒトの進化において必要なものだったのではないか、というのだ。

佐藤氏は、「最近の若者（最も進化した人類？）の行動には多重人格性が見られることがある」と述べる一方、「ネット心中や少子化などの世代の行動特性や体格の変化といった、数年、数十年単位の変化はゲノムで説明できないだろう」と言う。服巻氏もこれを受けて「ゲノムは楽譜。楽譜が同じでも、演奏によってまったく違う曲になる。裏を返せば、ゲノムを持つているのに使えない、という状況に陥る可能性もある」と、ヒトの未来に対する危機感を述べた。

佐藤氏が述べた「ゲノム研究者が素朴な疑問を持って研究していることへの安堵」と、「人間の進歩という話題で多様な領域の人々と議論できる場である『談義』への期待と関心」は、フロアの共感も呼んだことと思う。異分野の専門家が議論することによって専門用語の使用が減り、素朴な話題展開を見せたため、科学の専門知識のない人でもゲノム研究と自分たちの生活の接点を見い出せたよう

だ。フロアからは、「人間性はこれからも進化するのか」「生物の目的は子孫を残すことや利己的な遺伝子の自己複製といわれるが、ヒトの場合それが『自己実現』に向かい、少子化が起きているのではないか」といった質問が寄せられた。ゲノム研究といえば、DNA分子レベルの研究から、ようやくタンパク質レベルに踏み出したところである。しかし、談義では一気に個体の行動から世代の気質、そして人間性にまで話題が膨らみ、「私たちが知りたいのはそこなのだ」という気持ちをゲノム研究者も含め、多くの参加者が確認できたように思う。

「おもしろさ」が理解につながる

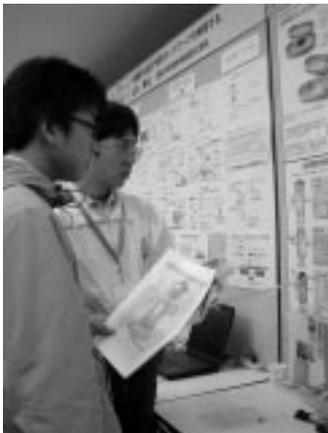
談義とは対照的に、「ゲノムセミナー」では、聴衆を専門外の市民と前提していたにもかかわらず、専門用語が（意識的にしろ、無意識的にしろ）少なからず使われていた。しかし、専門用語を使うことは必ずしも理解を阻むことにならないという発見があった。たとえば、「生活習慣病のゲノム解析研究」（加藤規弘国立国際医療センター研究所部長）は、遺伝性疾患と遺伝子欠陥の関係、ゲノム研究による医療への貢献の可能性といった、非常に聴衆の関心を引きつける切り口で

展開したため、研究そのものの技法についての専門的な説明部分もそれほど気にならなかった印象がある。

このことで、「相手の関心に寄り添う」「おもしろさを伝える」ということがSCにとって大切なのであって、必ずしも「わかりやすさ」「平易さ」が要求されるのではないということを実感した。ときとして、「わかりやすい説明」は「ツマラナイ話」にさえなりかねない（中学や高校の理科の教科書がその好例だ）。今後、科学者がSCの技術をトレーニングする必要性はもっと高まるだろう。同時に、SCを職業とするような専門家の登場も期待したい。

「勢ぞろい」の会場では、「こういつの、結構おもしろいね」と話し合う学生たちの声を耳にした。「勢ぞろい」に参加していた大学教授の一人もこう語った。「去年は、教授から動員をかけられて学生たちはしぶしぶ参加したという感じでしたが、今年は学会以上の意気込みが感じられました。研究者の喜びというのでしょうか、こんなおもしろいことをやっているのを伝えたいと言っています」

SC研究は動き出している。2004年は、いったいどんな「ひろば」が見られるのだろうか。ぜひみなさんも会場に足を運んでほしい。



### かさい なつこ

1968年、札幌生まれ。京都大学理学部を卒業後、同大学院人間・環境学研究所博士課程で学ぶ。医学系出版社に勤務した後、フリーライター＆編集者として独立。スポーツ・健康関連の雑誌・単行本を中心に幅広く活躍する。著書に「ウニの赤ちゃんにはとげがない」(恒星出版株式会社)「21世紀に何を食べるか」(共著、同)などがある。

## ゲノムひろばを見てきて

「談義」にしかできないこと

生命科学が、他の工学や物理学や数学といったサイエンスと異なるのは、参加者一人ひとりの期待がさまざまであることだ。たとえば「勢ぞろい」では、基礎分野から医学、情報、工学などゲノムに関して日本で行われているあらゆる領域の研究を一望できるようにアレンジされているとはいえず、どうしても研究者から参加者へ情報伝達の方向が偏ってしまつ。「勢ぞろい」を見ていた年配の男性から、こんな感想を聞いた。

「ゲノムひろばの広告を新聞で見て来ました。私はいまガンの治療を受けているので、ゲノム研究がガンの治療にどういう影響を与えるかを知りたかったのですが、今回はガンそのものについての発表がなかったのです。その意味ではもの足りなかったです」

一方、「談義」では、ゲストからのプレゼンテーションはある意味「前置」。ゲノム研究者以外のゲストやフロアを巻き込んだディスカッションが、生々しい個人のニーズ、社会のニーズをゲノム研究者にぶつけることを可能にしている。

目的は達成できたか？

社会との接点、双方向コミュニケーションをめざした「ゲノム談義」。京都会場のテーマは「人間性」というアカデミックなものであったが、果たしてその目的は達成できたのだろうか。

「確かに具体的な意味では、社会との接

点に欠けた部分があったかもしれませんが、しかし最大の目的は、ゲノム研究を相対化する、あるいは日頃考えていないことをゲノム研究という場に立ってお互いに考えるということ、それはまずまず達成できたと思います(加藤氏)

一方、理系大学院の修士課程在籍のある学生は「談義」を聴いて、「人間性」などは現在のゲノム科学にまつたくなじまないテーマで、ゲノムの切り口でやるのは無理じゃないかという感想を持ったという。「ひろば」は、市民向けに企画されたイベントであるから、話題が専門的な焦点からずれることは予想できるし、限界もある。ただ、修士課程の学生でさえ、一般の人が持つ疑問や関心、自分たちの研究に寄せられる期待を知らないという事実が明らかになり、彼らがそれを感じることができたなら、それはやはり「談義」のねらいが当たったといえるのではないだろうか。

職業としてのサイエンス・コミュニケーション  
来年からSCを研究しようというある大学院生が、ふと、私たちは裏方にしかないのですからね」と漏らした。SCは裏方の仕事だろうか。いや、サイエンス・コミュニケーションに、科学を育て、科学研究の方向を決める、という役割があるならば、これからの社会では主役になるかもしれない。むしろ、社会の中でサイエンス・コミュニケーションが生活のための職業として成り立たないほどなら、SCの未来は暗いのではないかと、私は思う。

オルターナティブとしての存在を超えて広がる

# ヨーロッパのチルドレンズ・ミュージアム

ハンズ・オン・ヨーロッパ第3回国際カンフェレンスから

レポーター 大橋 由紀

2003年10月22〜25日、ヨーロッパのチルドレンズ・ミュージアムをネットワークするNPO

「ハンズ・オン・ヨーロッパ」の第3回国際会議がイタリアで開かれた。

ミラノ、ローマ、ナポリで三つのチルドレンズ・ミュージアムを訪ねながら、

4日間にわたって行われた事例紹介や意見交換の様相から、学びの場の潮流を探った。



ネットワークを通じ情報交換

保存、陳列を中心とする美術・博物館の従来型の静的な展示手法に対して、ハンズ・オンとは来館者が自由に展示物に触って観察・体験をすることを通じて物事や現象の理解を深めるといって、参加型で利用者本位の展示手法である。60年代、このハンズ・オンをとり入れたアメリカのボストン・チルドレンズ・ミュージアムやエクスポラトリアム(サンフランシスコ)の大成功を契機として、ハンズ・オンをベースにするチルドレンズ・ミュージアムは世界中に広がっていった。

ヨーロッパでは、古くはロンドン国立

科学博物館に1931年に付設された

「こどものギャラリー」が今日のハンズ・

オン系科学館の先駆的存在であったといわれている。だが、単体で子どもを対象とするハンズ・オン系ミュージアムができるようになるのは、アメリカでの成功の影響を受けた70年代に入ってからのことだ。中でも、88年パリのラヴィレット

の科学産業都市内に設けられたシテ・

デ・ザンファン(Cité des enfants:子ども

の街)や、92年イギリスのハリファクスにオープンしたユリーカ(Eureka)

などの大型施設が知られている。しかし

実際には、有志の活動に支えられた小規模なチルドレンズ・ミュージアムが大半

であり、活動開始後、間もない組織も多い。

せつかく生まれた活動の芽を枯らさない

ためにも、チルドレンズ・ミュージアム間で活発な情報交換を促し、知識や経験を共有することを通じて、それぞれの

発展を支援することが必要だという関係者の共通認識のもと、98年に発足した団

体が、「ハンズ・オン・ヨーロッパ」だ。

98年10月、リスボンで開催された第1

回カンフェレンスでは、21世紀に求められるチルドレンズ・ミュージアムの新たな

アプローチとして、「ハンズ・オン」ではなく、

「マインズもオン!」、また、その3年後の2001年11月にロンドンで

開かれた第2回カンフェレンスでは、「学

ぶのために遊ぶ?」をテーマに、チルド

レンズ・ミュージアムの環境やプログラ

ムづくり、ほかの教育施設との位置付け

などについて、情報・意見交換がなされた。そして迎えた今回の第3回カンフェ

レンスのメインテーマは、ずばり「チルド

レンズ・ミュージアムの使命とは?」

だった。

公のサポートが得られず財政難

カンフェレンス第1日目のホストは、

ミラノのチルドレンズ・ミュージアム、

MUBA。MUBAは95年にNPOとして

発足以来、地元ミラノの大学をはじめ

とするヨーロッパの教育機関からの協力を得ながら、独自のハンズ・オン展示プログラムを企画・開発・展示してきた。現



在の展示は、「色」をテーマとするインタラクティブ・エキシビションだ。さまざまな遊びで構成されるそのプロセスは、普段あまり意識することのない色の大切さについて気づきを促し、色が持つさまざまな作用を観察・認識することによって、大人になってからでは発達が難しいとされる色への感受性を、子どもたちが身に付けることをねらいとしている。

ところで、MUBAは発足8年になる今日になっても、自身のミュージアムスペースを持たない「ホームレス」ミュージアムである。現在、ミラノ・トリエンナーレ内の展示スペースを1年に3カ月間借りて期間展示するほか、他のミュージアムに展示を賃貸することなどにより活動を続けている。この「ホームレス」という状況は、選択の結果ではなく、やむをえずの結果だ。

「発足当初はみな、めいめい自分の仕事を続けながら、手弁当で運営にあたりていました。現在は入場料、展示の賃料、企画料、寄付金などにより、なんとか8名の専属スタッフを置くまでになりました。それでも、展示を常設するスペースを借りるだけの財政的余裕はありません。市所有の遊休スペースの提供をこれまで何度も申し入れてきたのですが、学校でも幼稚園でも博物館でも科学

館でもない、従来の教育機関のカテゴリーのどれにも属さないチルドレンズ・ミュージアムに対して、市の対応はきわめて冷たいのが現状です。そこで今回、カンフェレンスのホスト国メンバーとしてカンフェレンスのテーマを設定するにあたり、できるならば、チルドレンズ・ミュージアムの使命や定義についてハンズ・オン・ヨーロッパとしての共通認識を形成し、そのことよってチルドレンズ・ミュージアムの社会における位置のよつなものを再確認したいと思ったのです」と、カンフェレンスのテーマ選択の背景について、MUBA代表のサビーナ・カンタレッリさんは切実な形相で語った。

経済が成熟し、税収は頭打ちとなる反面、社会保障費の負担が重くのしかかるヨーロッパでは、年々、教育・文化への予算配分が厳しくなる一方である。その中で、同じ学びの場ではあっても、学校、博物館のような公の肩書きを持たないチルドレンズ・ミュージアムへの公的助成は皆無に等しい。会場内の23カ国123名のカンフェレンス参加者も、カンタレッリさんの発言に思わずうなずく。厳しい財政状況は、程度の差はあれどもヨーロッパ中、どこも同じなのだ。

一方、2日目に訪れたローマのチルド

レンズ・ミュージアム、エクスプロラは、2001年5月にオープンした「子どもたちのために作られた小さな街」。ここで子どもたちは、銀行員、郵便局員、スーパーの店員、テレビのプロードキヤスターなど、さまざまな職業に就いたり、またはお客になったり、リサイクルごみの分別をしたり、と実生活上のさまざまな体験をすることができる。このエクスプロラは、ローマ市中心部ポロ広場近くの、市電の旧車庫をミュージアム用地として市から譲り受けることのできた、比較的幸運な部類に入るチルドレンズ・ミュージアムだ。当時の政権が、家族や子どもたちを重視する政策を打ち出し、市政に新たに「幼児と家族振興局」を設けたことが追い風となった。しかしながら、ミュージアムへの改築費、さらに完成後の運営費はすべて自前であり、厳しい財政状態に変わりはない。

産業・経済振興を視野に入れて

MUBA、エクスプロラのように、四苦八苦しながらもなんとか自力で運営を続けるチルドレンズ・ミュージアムが大半である一方、中には公の後ろ盾を受けている施設もある。キーワードは「産業振興」「経済発展」。同じチルドレンズ・

ミュージアムでも、これらのお題目があれば税金を投入するのでも正当化される。

ナポリで訪問したチルドレンズ・ミュージアムは、歴史的につねに経済後進地域であった、イタリア南部の発展支援のための政府予算枠を獲得し、2001年11月にオープンしたチッタ・デラ・シエンツァ(Città della Scienza: イタリア語で「サイエンス・シティ」の意味)内にあつた。当施設は6〜18歳を対象とする科学館、ベンチャービジネスのインキュベーションセンター、職業訓練センター、コンベンション施設などから成り、明日を担う子どもたちに科学への関心を持ってもらう機会づくりから、地域産業・人材育成のための実際的なサポートまでを行う、いわば地域産業育成支援基地とでもいえるべきものである。

「五感を全開させるインタラクティブ・スペース」とつたう、0〜10歳対象のチルドレンズ・ミュージアムは、科学館の中にある。このチルドレンズ・ミュージアムのユニークな点は、展示、デザインなどの企画を、すべて子どもたちと共同で手がけたことだ。確かに、「話す木」木の上の基地」「想像する場所どこにでも行ける船」などのハンス・オン展示は、いかに子どもらしい発想だ。チッタ・デラ・シエンツァの運営母体は、大学教授

や科学者などを主なメンバーとするNPOの財団で、オープン初年度の2002年は小学生や中高生を中心に約35万人が訪れて成功を収めている。

また、イギリス・ハリファクス市のユーリーカが現在取り組んでいるSTEMも、地域経済開発の一環として位置付けられたプロジェクトだ。STEMとはサイエンス、テクノロジー、エンジニアリング、マス(算数)の頭文字をとったもの。最新技術を駆使したインタラクティブ・ギャラリーでは、子どもたちにハンス・オンの手法を用いてわかりやすく伝えている。これにより、科学技術は決して難しいものではないこと、自分たちにもそれをつくり出していく能力や創造性があることを自覚させ、子どもたちを地域経済の担い手としてエンパワーすることを目的としている。

このプロジェクトは、ユーリーカの地元、ヨークシャーの地域開発庁( )が資金を提供、ユーリーカが企画・開発・展示を行い、そして本展示とは別に「出前展示」用にやはりユーリーカが開発したキットを、ヨークシャー地域の図書館や美術・博物館が展示・展開するという、ヨークシャー地域内の三者による共同プロジェクトである。「このプロジェクトが持つ大きな意味は、ユーリーカが従来

型のミュージアムと協働するということ。つまり、ユーリーカが、オルターナティブとしてのチルドレンズ・ミュージアムの立場から一歩前進して、その存在が社会からより広く認知されるようになったということだと、ユーリーカのSTEMプロジェクトの展示責任者は熱く語った。

地域住民の交流を促進する場として

翻つて、昨年6月にイースト・ロンドンにオープンしたばかりのディスカバーは、計画・実現の過程で将来の利用者となる地域住民が参加した、グラスルーツ(草の根)型のチルドレンズ・ミュージアムである。イースト・ロンドン地区では110に上る言語が日常的に話されるといわれるほど多くの移民が住む。よっ

て、言語や文化背景の多様な子どもたちが、どのように共に学んでいったらよいのが深刻な課題となっていた。そこで、世界のさまざまな「物語」に耳を傾けたり、自分の物語を創作して語ったり演じたりすることによって、子どもたちが想像力を駆使し、創造性を発揮させながら、英語に親しみ、互いに交流できるようなチルドレンズ・ミュージアムをつくるという計画が持ち上がったのだ。

構想からオープンまでの5年間、地域の子どもたち、親、学校を巻き込み、度重なるミーティングやワークショップの場を通じて、どのようなミュージアムにしたらよいかについてアイデアが練られ、実際に具現化されていった。

スタッフいわく、「主催者側が用意したたたき台が、まったく予想もしていなかった方向に発展していくことがしばしばあつた」そつだ。また、オープン後も子どもたちが定期的に集まり、ディスカバーがイースト・ロンドン地区在住の子どもたちにとって、いつまでも魅力的な場であるためのアイデアを出し合い、それが現場に生かされている。

ここディスカバーは、子どもたちの学びと交流の場であると同時に、計画の過程に住民の関与を促すことによつて、ばらばらであつた地域住民たちが、子どもたちを通じて交流できる機会ももたらした。ある意味で都市の中のコミュニティセンター的なスペースの役割も果たしているといえる(実際、ミュージアム内の庭「ストーリー・ガーデン」は開館時間中、無料開放している)。

アメリカのサンタフェ・チルドレンズ・ミュージアムでの取り組みも地域住民の参加によるものだった。地域住民からの提案により、2001年に起こつた



米国同時多発テロのトラウマを克服し、住民一人ひとりがそれぞれ心の中に安心感を取り戻すために、異なる世代間でインタラクティブ・プログラムを実施することになったのだ。そのうちの一つは、地域在住のおじいさんやおばあさんが先生となって子どもたちに料理を教えるというもので、大成功を収めたという。「チルドレンズ・ミュージアムは子どもたちのみならず、地域にも希望や将来への展望、そして継続的に創造性を発揮する場を提供することができるのです」。この取り組みを紹介したニューメキシコ大学ヴェーラ・ジョン・スタイナー教授は、そう力説した。

### 多様な役割に無限の可能性

チルドレンズ・ミュージアムの使命とは何か？ 結局4日間のカンフェレンス期間中、当初の目的であった共通認識の形成に至ることはなかった。しかし、チルドレンズ・ミュージアムがこれからも確実に広がっていく動きであることだけは明らかに伝わってきた。カンファレンス中に出会った、チルドレンズ・ミュージアムの運営にかかわる人の多くが、また、これからチルドレンズ・ミュージアムを開きたいと希望する多数の人たちの

ほとんどが、元あるいは現役の教師であったことが、何よりも如実にそれを物語っている。子どもたちの教育の最前線にいる現場の先生たちが、「現在の画一的な学校教育制度の中では、子どもたちの教育は不十分」と感じ、また度重なる学校改革が機能しないことしにびれを切らし、自ら行動に移しているのだ。日本から見ると、自由度があり、個を生かすように思えるヨーロッパの教育である。しかし、ヨーロッパの現場の教師たちには、決して満足できるレベルとは受けとめられていない。

「いままぐ急いで定義付けしなくても、それぞれのチルドレンズ・ミュージアムが置かれた状況のもとで活動し、実績を積んでいく中から、各々が納得できる使命や定義を見つけていけばいいのではないかと」と、ある参加者は言った。すなわち、チルドレンズ・ミュージアムとは、子どもたちがさまざまな体験を通じて学ぶ場であると同時に、共に過ごす時間が少なくなつた現代の家族がいつしよに遊び、学べる場でもある。また、空き地や遊び場をなくした子どもたちが仲間と安心して遊べる場であり、異なる文化背景を持つ子どもたちが交流することによって相互理解を深める場でもある。または、日頃とっつきにくい科学や技術へ慣

れ親しむ機会であり、さらに地域住民が子どもを介して集い、つながりを取り戻す場でもあり得る。つまり、学校、家庭、地域と、子どもを取り巻く現代社会が抱えるさまざまな課題を引き受けて、子どもたちの成長のために、よりよい機会・環境を提供する可能性を持つ場なのだ。また、そうであつてこそ、広く社会から必要とされ、息の長い活動ができるチルドレンズ・ミュージアムであり得る。

幼稚園でも学校でも博物館でもない、チルドレンズ・ミュージアムだからこそ、無限の可能性を秘めていると考えることもできるだろう。そして、チルドレンズ・ミュージアムが今後もその力を発揮し続けるためには、その多様な役割、価値、そして可能性を広く社会にアピールし、認知度を高めることにより、公私のサポーターを増やしていくことが不可欠である。その意味でも、ハンス・オン・ヨーロッパに課される期待は今後ますます大きくなることであろう。

おおはし ゆき

1966年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、6年間の外資系銀行勤務を経て、1996年より(株)ヒューマンルネサンス研究所研究員。主にアジアのライフスタイルや心とからだをテーマとする生活文化研究に従事。2000年4月よりミラノ在住。フリーで通訳、翻訳、リサーチ等に従事する。

心のおもむくままにシャッターを押す

# 小学生写真家たちがとらえた「風景」

「Untainted Eyes - 染まらない瞳」ヨーロッパ巡回写真展

レポーター 魚住 早智子

写真家にとっての永遠の課題とは、カメラというインターフェイスを意識することなくダイレクトに被写体をとらえ、直感的にシャッターを押すことではないだろうか。それは、型にはまった写真の概念に染まることなく、写真の技術に捕われない子どものような感性で世界を見つめることにほかならない。

使い捨てカメラで自由に写真を撮る

2000年冬、HRIのリサーチプロジェクトで、ニューヨークの子どもたち70人（8歳から10歳）を対象に、写真のワークショップを行った。使い捨てカメラを1週間子どもたちに持たせ、日常生活の中で自由に写真を撮らせることで、人類的観点から彼らの世界観を垣間見ることが目的だった。写真好きの私にとって、このプロジェクトをリソースとした写真展企画への関心がムクムクとわき上がってきたのは、自然な成り行きだった。さっそくプロジェクト担当のHRIの中間氏に写真展のアイデアを提案

したところ、写真の使用を快く承諾してくださった。

まずはワークショップで子どもたちに直感的にカメラのシャッターを押すことを指導、カメラのレンズを目の延長としてとらえ、あたかもまばたきをするかのように、自己の情緒に純粹に反応しながら写真を撮るプロセスを教えることから始めた。美しい写真を撮ることをあえて意図とせず、写真のフレームを意識しないでカメラのファインダーをのぞくことで、斬新な視点を持った大胆なコンポジションの写実が生まれる。使い捨てカメラは技術をほとんど必要としないので、被写体への興味が写真の中にダイレクトに反映される。

Duisburg



Benjamin Fabry 10歳

Lehmbruck Museum Entrance



Julliane Reiching 9歳



Installation



Mira Nagy 11歳

## オランダとドイツで展覧会を開催

結果は、予想以上に不思議でももしろい写真であふれるものとなった。早速2001年の春から、ニューヨークでこの写真展の開催を試み始めたが、9月11日のテロ以降、ニューヨークはアートどころではない雰囲気がい、足踏み状態が続いていた。そんな中、ヨーロッパで彫刻の美術館として著名なドイツのヴェルヘルム・レンブルック・ミュージアムが、展覧会の開催地として一番手を挙げてくれた。この美術館の中には、充実した子どもの教育プログラムと展覧会を企画するチルドレンズ・ミュージアムが存在し、私のパートナーとして写真展開発への協力と、ヨーロッパにおける展覧会のプロモーションにも力を注いでもらえることになった。

この展覧会は「Untainted Eyes 染まらぬ瞳」と名付けられ、2002年7月、ニューヨークからの写真30枚にドイツの子どもの写真を30枚加え、当ミュージアムで開催された。その後、オランダとドイツを3カ所巡回し、マスコミにも広く取り上げられ、今年3月にはドイツのベルバート市にあるお城のミュージアム、シュロス・ハーデンブル

グへ巡回する予定である。

染まらぬ子どもの視点で見た世界

キュレーションのポイントとして、展覧会のタイトルにもあるように、決して大人には撮ることのできない、染まらぬ子ども視点で見た世界がダイレクトに表現されている写真を選択した。これらの写真はすべて、ネガの中のイメージをカットせずにそのままプリントしたもののばかりである。展覧会のキュレーションに加えて、インスタレーションデザインへの配慮も細かく行った。巡回先の空間にフレキシブルに対応できるように、モジュラーシステムを開発し、ニューヨークの写真はデジタル化して、壁から浮きあがるような軽やかなフレームをデザインした。微妙な風でもゆれ動く花と木をモチーフにしたスタンドに、子どもたちの顔写真と巡回先の写真を取りつけ、空間に動きを持たせた。

この展覧会のワークショップで撮られた写真の総数は約3500枚、参加した子どもたちは5歳から13歳の合計125名、その中から60枚を選択して展示している。今後も各地へ巡回することに成長し続ける展覧会であってほしい。



Rheda Castle



Installation



Installation

## Rheda -Wiedenbrueck



Rheda Castle Gallery



Julia Nuehuser 10歳



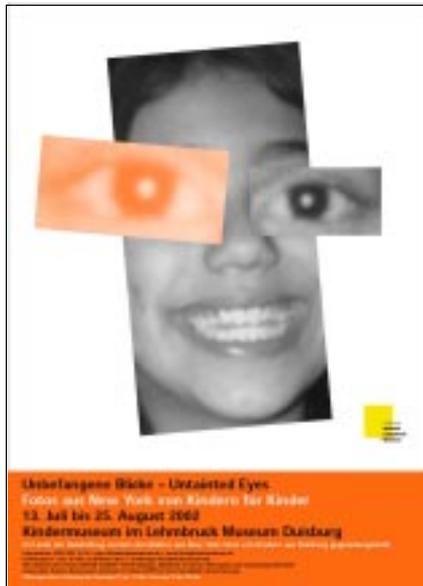
Luisa Fresse 10歳



Villa Zebra Children's Museum



Bekay 7 歳



Poster (Lehmbruck Museum)

## Rotterdam



Kevin 9 歳



Shenecqua Potter 11 歳



Jennifer McClung 11 歳

## New York



Alexandra Ruffler 11 歳



William Sheehan 10 歳

### 「Untainted Eyes - 染まらない瞳、ヨーロッパ巡回写真展」開催地

- The Wilhelm Lehmbruck Museum, Duisburg, Germany (July 13 - Aug 25 '02)
- Villa Zebra, Rotterdam, Netherlands (Sep 29 - Oct 27 '02)
- The German-American Institute, Tuebingen, Germany (May 9 - July 18 '03)
- Rheda Castle of the Princely Family, Bentheim-Tecklenburg, Rheda-Wiedenbrueck, Germany (Sep 5 - Sep 30 '02)
- Museum Schloss-Hardenberg, Velbert, Germany (March 28 '04 から開催予定)

### うおずみ さちこ

「Untainted Eyes - 染まらない瞳」ヨーロッパ巡回写真展キュレーター。1956年大阪府生まれ。ニューヨーク在住24年、ウオズミ・デザイン・コンサルティング代表。ニューヨークのパーソンズ・スクール・オブ・デザインのプロダクトデザイン学科の学部教員を10年務め、デザインコンサルタント、展覧会キュレーターとしても活躍、社会的観点からデザインに取り組んでいる。Untainted Eyes展のほかにも、現在ユニバーサルデザイン・ヨーロッパ巡回展のキュレーターとプロジェクトディレクターを務めている。